

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：35412

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02604

研究課題名(和文) 幼小接続をスムーズにする鍵は何か：円滑な接続を実現する要因を探り対策を提案する

研究課題名(英文) What is the key to a smooth transition from preschool to elementary school:
Exploring the factors that enable a smooth transition and proposing measures

研究代表者

山崎 晃 (Yamazaki, Akira)

広島文化学園大学・学芸学部・教授

研究者番号：40106761

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は幼小接続が実現しない原因を探り、幼小接続カリキュラム・教育課程の編成に関するモデルを提案することであった。以下の研究成果を得た。(1)コロナ禍が幼小の就学移行期のカリキュラムや幼児・児童の心身に影響していること。(2)保育者は「見守り、子どもの姿を認め、環境構成を行うとする姿勢」が、小学校教員は「直接的な指示」が多いこと。(3)幼児教育アドバイザーの助言は、幼稚園と小学校の教育課程・カリキュラムや指導内容の違い、発達の理解等が主であること。(4)国立大学附属幼稚園における教育課程や指導方法は、教育課程の進捗状況には異なること。(5)これらの結果を基にモデルを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、幼小接続をスムーズにする鍵は何かを基本的な問いとして、接続を妨げる原因を探り、それを基に具体的対応策を提案することであった。小1プロブレムの議論から、教育内容や教育カリキュラムの接続についてどうあるべきかを明らかにすることに社会的意義がある。具体的には、幼小連携を進めるために、不可欠な幼小接続カリキュラム・教育課程の編成モデルを、(1)幼稚園・小学校の学校組織風土と保育者・教員のパーソナリティに係る「幼小接続に係る積極的関与モデル」と、それを基に(2)「幼小接続 教育課程編成モデルプロセスモデル」を提案し、カリキュラム編成のための環境と実際の編成手順を明示したところに意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to explore the causes of the failure to achieve kindergarten-primary school connections and to propose a model for the organization of kindergarten-primary school connection curricula and pedagogies. The following research findings were obtained. (1) The COVID19 affects the curriculum and the physical and mental health of children in preschoolers and during the transition to elementary school. (2) Child care providers' attitude, represented by "watchful waiting," is to recognize the child's appearance and structure the environment, while elementary school teachers tend to give "direct instructions". (3) Advice from early childhood education advisors focuses on the differences between kindergarten and elementary school curricula, curriculum and content, and understanding of development. (4) Curricula and instructional methods in national university kindergartens differ in terms of curriculum progress. (5) Based on these results, a model was proposed.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼小接続 教育課程 接続カリキュラム 編成モデル 幼児教育アドバイザー 個別の指導計画

1. 研究開始当初の背景

幼稚園、保育所及び認定こども園と小学校との連携・接続に関する調査によれば、「連携の予定・計画がない」、「連携・接続を検討中」、「年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない」と回答した園の割合は全体の59.6%であり、幼小接続・連携が十分に行われていない(国立教育政策研究所、2015)。

従来、幼稚園や保育所、認定こども園から小学校への接続に関する研究は、小1プロブレムの問題を中心に議論されてきたが、近年の研究の関心は「教育内容や教育カリキュラムの接続」に移行してきており、今日の問題意識は小学校教育への適応を図ることにある。したがって、障害の有無にかかわらず、全ての子供が小学校教育にスムーズに移行し、適応した小学校生活を過ごすことができるようにするためにどのような教育カリキュラムや教育内容であるべきかの方向性を示し、改善して方策の提案は喫緊の課題である。幼小接続に関する問題について、個別の要因を明らかにすると共に、複数の要因がどのような関係にあるのか、どのように絡み合っているかを検討する必要がある。さらに、従来の研究とでは考慮されることが少なかった就学前から入学後の学校適応までを一連のプロセスとして捉えることにより、円滑な幼小接続が可能となると認識した。以上のことが研究開始の背景であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、幼小接続が進まない原因を特定し、その克服のためのカリキュラム編成の背景となるベースモデル及び実際のカリキュラム編成に係るカリキュラム編成モデルを提案することである。

先行研究においては、幼小接続が進まない原因を個別に取り上げているが、幼小接続に関わる要因は複数あり、かつ、その要因は相互に複雑に絡み合っているため、単独の要因を特定し、その影響を明らかにするだけでは幼小接続の課題の解決にはつながりにくい。そこで本研究においては、まず、幼小連携・接続の背景に関するモデル、次に幼小接続カリキュラムに関するプロセスモデルを構想し、対応策・解決策につながる枠組みを提案することとした。

本研究の特色は、カリキュラム編成時において、「教育目標・目的」を出発点とし、カリキュラム編成に当たって「教育活動・教育内容・教育方法」、実際の幼児・児童の活動、支援・配慮の必要な幼児・児童に対する配慮、及び学校全体の活動に関する Lillejord ら(2015)の「プロセス」「学際性」「透明性」「連続性」「関係性(パートナーシップ)」評価を考慮したプロセスモデルを提案する点にある。

3. 研究の方法

(以下の1)から9)までの番号は「4. 研究成果」の番号に対応している。))

(1) 文献に基づいた研究

- 1) 幼小接続のプロセスモデル(図1)を構想し、モデルの内容やプロセスを明確にするために幼小接続カリキュラムに関連する先行研究及び組織・社会的領域の研究等を精査し、検討し、修正した。
- 2) NISE データベース(インクルーシブ教育システム構築支援データベース)の分析により、幼稚園・小学校・中学校・高等学校における個別の教育支援計画と個別の指導計画の関係について、検討した。
- 8) 幼小連携の課題を明らかにするために、全国国立大学法人附属幼稚園の「接続期教育課程に関する調査報告書」(宮城教育大学附属幼稚園、2021)に掲載された内容について、進捗の程度に基づき、(ア)教育課程編成、(イ)教育方法、(ウ)情報の共有、(エ)これまでの経緯と課題を分析した。

(2) インタビュー記録に基づいた研究

- 3) 幼児教育アドバイザーの幼稚園教育への働きかけの変容を捉えるために、幼児教育アドバイザーへのインタビューの記録をもとに、継続的にアドバイスを受けた幼稚園の保育者の専門性や資質の向上、意識の変化を捉えた。
- 4) 幼児教育アドバイザーの継続的な幼稚園の園内研修会への働きかけを捉えることによって、幼児教育アドバイザーの助言や指導・支援が時期によりどのように変容し、幼児教育に影響を与えたかを確認した。

(3) アンケート調査に基づいた研究

- 5) 新型コロナウイルス感染症が就学移行期のカリキュラムへ与えた影響を明らかにするために新型コロナウイルス感染症に伴う登園・登校の制限が就学移行期のカリキュラムと児童の生活にどのような影響を与えたかをアンケート調査により明らかにした。
- 6) 幼児教育アドバイザーが研修会において、どのようなことを助言・指導しているのかを、インタビューの質問とアドバイザーの回答をテキストマイニングによる分析によって明らかにした。
- 7) 保育者と小学校教員に対して、場面見本法により保育場面と学校場面の2場面を提示し、保育者と小学校教員という立場が就学移行期の子どもへの対応の仕方によりどのような違いをもたらしたかを明らかにした。

(4) 幼小接続モデルに関する研究

- 9) 本研究の目的である『幼児教育から小学校教育に資質・能力をつなぐカリキュラムが編成・

実施されないのはなぜか』を明らかにする枠組みとなる2つの幼小接続モデルを提示した。

4. 研究成果

1) 概要モデルの作成

先行研究に基づき、幼小接続のプロセスモデル元図(図1)を構想した。(ア)教育目的・教育目標を起点に、(イ)教育課程・カリキュラムの編成、(ウ)教育内容・保育内容の実施・展開が行われる。その際に(ア)(イ)(ウ)の一貫性・連続性が考慮され、あわせてプロセス・連続性・透明性・関係性等の視点からの検討・見直しがなされる。その上で、児童の適応状況、満足度、連携の質の向上などの指標に基づく評価のプロセスを構造化した。

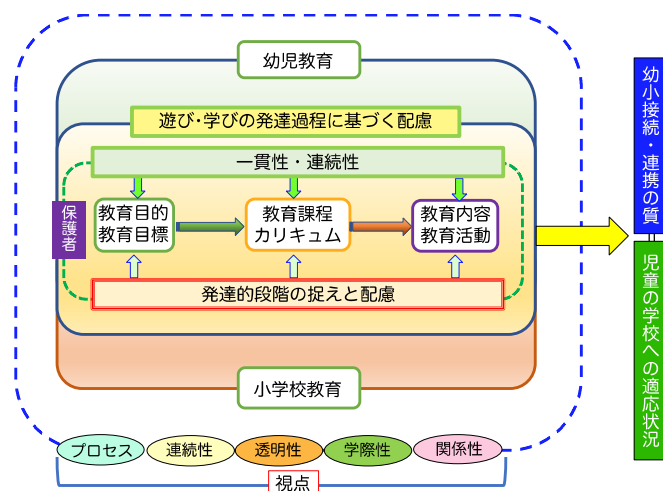


図1 幼小接続のプロセスモデル

2) 幼稚園・小学校・中学校・高等学校における個別の教育支援計画と個別の指導計画の関係 NISE データベースの分析をとおして(2)小学校と中学校の比較を中心に

本研究の目的は、幼小接続に関する諸問題のうち、個別の教育支援計画と個別の指導計画が幼稚園、小学校、中学校、高等学校でどのように捉えられているかの特徴を捉えることであった。分析の結果、個別の教育支援計画と個別の指導計画の作成率には、校種間で違いがあること、小学校と中学校の特徴語についても違いがみられることが明らかになった。さらに、小学校と中学校をまとめた記述内容については、8つのカテゴリー(「個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成」、「保護者と学級担任の情報の共有」、「特別支援学級や通常学級に在籍する児童生徒の情報共有や連携」、「特別支援に関わる研修による理解の広がりや深まり」、「一人一人のニーズと地域の支援体制の構築」、「特別な支援が必要な児童生徒への支援活用」、「期ごとの計画に関する評価」、「児童校生徒に対する個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成や支援」)に分けられることが明らかになった。小学校と中学校では計画に関して記述された内容には大きな違いはみられなかった。個別の教育支援計画と個別の指導計画をつなぐための、地域における関係機関の連携システム構築の必要性について考察した。(2020、子ども学論集、2020、6、1-14)

3) 幼児教育アドバイザーの幼稚園教育への働きかけの変容を捉える

本研究の目的は、幼児教育アドバイザーから継続的にアドバイスを受けた幼稚園教員の専門性や資質の向上、意識の変化がみられるかを明らかにすることであった。各期の特徴は以下のようなものであった。第1期では、主に研究、内容、繋ぐ、交流、幼稚園等が配置され、研究をどう進めるか、何を研究テーマにするか、当該幼稚園の研究テーマである幼小連携に係る活動等の内容であった。第2期では、主に生活、時間、意識、考える等が配置されて、園内研修の内容、小学校との交流を通して何を考え、何を意識することが重要であるかなど、研修を受ける姿勢の在り方などに関するアドバイス等の内容であった。第3期では、主に気持ち、園、保護者、環境等が配置され、幼児の行動の受け止め方、発達の捉え、保育方法や保護者に関する内容であった。第4期では、主に保育場面、遊ぶ、遊び、担任等が配置され、保育場面や保育内容、遊びに保育者がどのように関わるかなどの保育方法や、今後の保育の質の向上に関わる内容であった。幼児教育アドバイザーのアドバイスは、研究、研修、そして共通認識等に関わることから、発達や行動の捉え方へ、さらに支援の内容や研究の継続に関する内容へと変化し、時期により保育・保育者に変化が見られた。(子ども学論集、2021、7、15-25)

4) 幼児教育アドバイザーは幼稚園の研修にどのように関わっているか 幼稚園への働きかけを経時的に捉える

本研究の目的は、幼児教育アドバイザーの助言や指導・支援が時期によりどのように変容していくかを確認することであった。本研究では、幼稚園における約1年間の幼児教育アドバイザーの指導の変化を4期に分けて検討した。その結果、第1期は子どもの発達の状況、園や保育者・保育の課題に言及、第2期は幼稚園、保育所と小学校の組織やシステムの違いを認識することや

保育者の幼児に対する指導・援助・保育に言及、第3期は幼稚園と小学校の指導の違い、幼児の発達段階、幼児の発達の解、保育者の省察の重要性などに言及、第4期は保育内容や発達を確実に捉えること、保育者自身の認識や行動を変えようとする心構えが幼児教育の質を向上させることなどに言及していた。このような結果は、時期によるアドバイス内容の経時的変化が見られることを明らかにした先行研究と大枠では一致していた。また、幼児教育アドバイザーの指導内容の変容は、今後の幼児教育研修や幼小連携・接続の在り方に示唆を与えるものであった。(子ども学論集、2022、8、1-10)

5) 新型コロナウイルス感染症が就学移行期のカリキュラムへ与えた影響に関する実態調査

本研究の目的は、新型コロナウイルス感染症に伴う登園・登校の制限が就学移行期のカリキュラムと児童の生活にどのような影響を与えたかを検討することであった。研究の結果、約3割の小学校教員が例年の児童の様子との違いを報告していた。違いを感じる側面として、生活面、学習面、対人面が挙げられた。生活面や学習面については、コロナ禍における家庭の状況を反映していると考えられた。家庭の経済状況による違いを検討した酒井他(2021)の調査によれば、経済状況を苦しいと感じる保護者の方が、そうでない保護者よりも休校中の精神的負担は高く、子どもへの関わりや食事、学習面での配慮は低かった。また、経済状況が苦しい家庭の子どもほど、心理面ではイライラしており、身体面では体力の低下や寝つきの悪さがあることが示された。また、先行研究(河原、2021)と同様に、コロナ禍における仲間関係の不安がみられた。加えて、同級生や上級生と関わる就学移行期の行事も制限されたことが分かった。新型コロナウイルス感染症の拡大下で就学前施設も、小学校も、家庭も混乱した状況で、就学前施設から小学校へと大きな環境移行を経験した子どもたちの育ちについては今後も注視する必要があることが明らかになった。(比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究、2022、8、187-198)

6) 幼児教育アドバイザーは研修会で何を指導しているのか インタビュアーの質問に基づく分析から

本研究の目的は、幼児教育アドバイザーが研修会において、どのようなことを助言・指導しているのかを、インタビュアーの質問に基づいて、明らかにすることであった。具体的には、第1に、幼児教育アドバイザーを対象としたインタビュアーの発言の特徴を明らかにすること、第2に、インタビュアーと幼児教育アドバイザーの役割に関する重要語の変化を捉え、幼児教育アドバイザーの役割が訪問時期によって異なるかを明らかにすること、第3に、インタビュアーの質問に基づいて捉えられた特徴語の前後の発言内容を分析し、幼児教育アドバイザーは役割として何を重要なこととして捉えているかを明らかにした。研究の結果、インタビュアーの発言について、(1)特徴語として、1回目は 幼稚園 先生、2回目は 幼児 交流、3回目は 保育園 発表、4回目は 幼稚園 小学校 思う、5回目は 見る 話 保育、6回目は 見る 保育 アドバイザー、7回目は 先生 様子 思う、8回目は 事例 話すなどが抽出され、訪問時期による違いがみられた。(2)重要語について2検定を行った結果、幼児教育アドバイザー 交流 幼児 先生 幼稚園 保育園 事例 連携 見る が有意であり、時期による出現頻度が異なっていることが明らかになった。(3)訪問回数より、幼児教育アドバイザーの幼稚園や保育者に関する指導・助言などの発言が、個別のことから全体的・俯瞰的なことへと変化することが明らかになった。(子ども学論集、2023、9、1-11)

7) 「保育者と小学校教員の就学移行期の子どもへの対応 保育場面と学校場面における対応の比較

本研究の目的は、場面想定法を用いた調査により、保育者と小学校教員という立場が就学移行期の子どもへの対応にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることであった。その結果、回答者の立場による対応の違いが確認された。従来から指摘されてきたように、保育者においては「見守る」という記述が特徴的であり、子どもの姿を認め、活動に集中できる関わり・環境構成を行うとする傾向にあった。他方、小学校教員においては、席に戻るよう指示し、席を移動させるといった対応が特徴的であった。また、本研究では、保育者と小学校教員のいずれも、自分が置かれた立場によって子どもへの対応を使い分ける可能性も示唆された。保育者・小学校教員ともに、保育場面では保育者は「見守る」などの対応を行うとする回答が、学校場面では小学校教員は「席に戻るよう指示する」などの対応を行うという傾向が強いことが示された。(香川大学教育学部研究報告 2023年度刊行予定;論文投稿済み)

8) 国立大学法人附属幼稚園における教育課程や指導方法等についての検討

本研究の目的は、幼小接続・連携の進捗状況に関する園自身による評定値(高・中・低)が幼小連携における(ア)教育課程編成、(イ)教育方法、(ウ)情報の共有、(エ)これまでの経緯と課題の捉え方とどのように関係しているかを明らかにすることであった。研究の結果、(ア)教育課程編成に関して、進捗状況評定値による違いがみられ、高群では異校種が協同でカリキュラムを編成することなど、中群では学び、教育課程、育つなど、低群では指導計画の作成、連携が特徴的であった。(イ)教育方法に関して、高群ではカリキュラム、評価、中群では共有、活動、図る、理解、話し合い、特別支援、低群では活用、入学、参観、小学校が特徴的であった。(ウ)情報の共有に関しては、高群ではカリキュラム、学習、実践、幼小、接続、中群では共有、

進学、育ち、計画、低群では育つ、本園、研修が特徴的であった。(工)これまでの経緯と課題に関しては、高群ではカリキュラム、評価、学び、指導、目指す、中群では課題、相互、共有、連携、幼稚園、研究、低群では取組、交流活動、育つ、内容、学ぶ、進めるが特徴的であった。幼小接続・連携の進捗状況の把握と教育課程編成や指導方法・内容とが関連していることを示しており、連携・接続プロセス解明の必要性を示唆するものであった。(2023年度に大学の紀要に投稿予定)

9) 幼小接続カリキュラム・教育課程編成に係る編成モデルの提案

『幼児教育から小学校教育に資質・能力をつなぐカリキュラムが編成・実施されないのはなぜか』について、上記1)から8)までの研究と先行研究を基に幼小接続カリキュラムの編成と実装化に資するモデルを構築した。

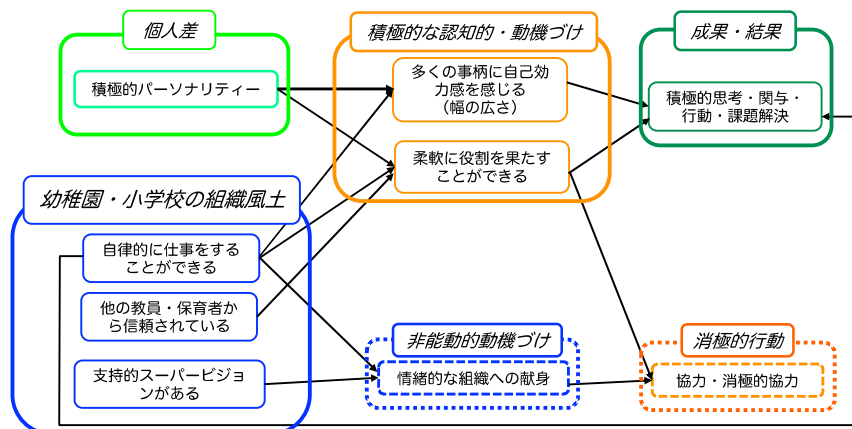


図2 幼小接続に係る個人差、組織風土、動機づけ関係モデル

具体的には「幼小接続に係る積極的関与モデル」(図2)と「幼小接続 教育課程編成モデル」(図3)を提案する。幼小接続に係る積極的関与モデルでは(ア)幼稚園や学校の持つ施設・組織風土・特性及び、(イ)それらの構成員である保育者・教員のパーソナリティが教育に係る多くの活動の動機づけとその後の結果に影響を与えると想定した。(ア)の風土・特性とパーソナリティがその後の行動を規定することになり、組織風土と参加する一人一人の認識に基づく行動と、(イ)幼小接続 教育課程編成モデル編成の開始や進捗、深まりに影響すると予想したモデルである。次に、幼小接続 教育課程編成モデルでは、教育目的・目標、教育課程・カリキュラム、教育活動、評価の順にプロセスが進み、一貫性・連続性を確保するメカニズムを想定した。こうした2段階のモデルを構想することによって、職場環境の特性を踏まえて幼小連携に係る土壌を醸成することが異校種連携の出発点になると考えられる。

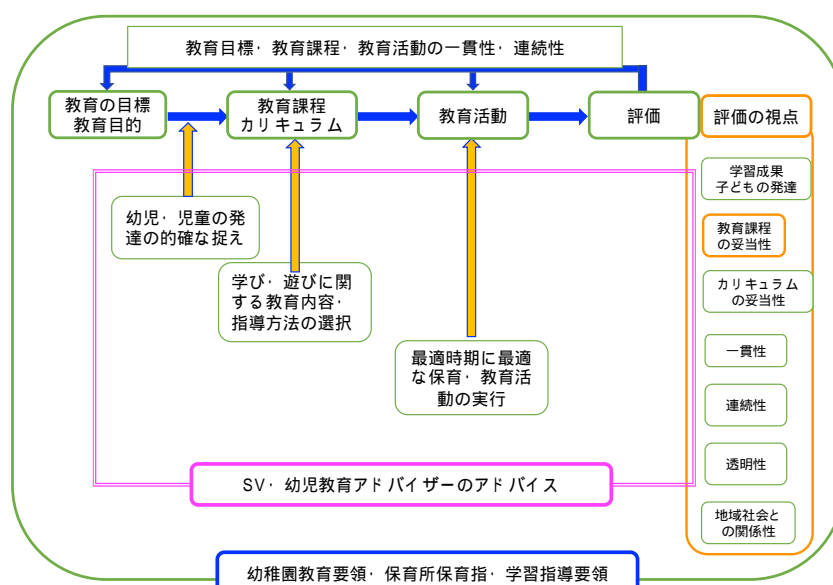


図3 幼小接続 教育課程編成モデル

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 山崎晃・越中康治・松井剛太・濱田祥子・東和子	4. 巻 9
2. 論文標題 幼児教育アドバイザーは研修会で何を指導しているのか インタビュアーの質問に基づく分析から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 子ども学論集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 濱田祥子・越中康治・松井剛太・山崎晃	4. 巻 6
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症が就学移行期のカリキュラムへ与えた影響に関する実態調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究	6. 最初と最後の頁 187-198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎晃・越中公示・松井剛太・濱田祥子・東和子	4. 巻 8
2. 論文標題 幼児教育アドバイザーは幼稚園の研修にどのように関わっているか 幼稚園への働きかけを経時的に捉える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子ども学論集	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎晃・松井剛太・越中康治・濱田祥子・東和子	4. 巻 7
2. 論文標題 幼児教育アドバイザーの幼稚園への働きかけの変容を捉える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島文化学園大学大学院教育学研究科 子ども学論集	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎 晃・松井剛太・濱田祥子	4. 巻 6
2. 論文標題 幼稚園・小学校・中学校・高等学校における個別的教育支援計画と 個別の指導計画の特徴を捉える - NISEデータベースの分析をとおして(2) 小学校と中学校の比較を中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島文化学園大学大学院教育学研究科 子ども学論集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 越中康治・松井剛太・濱田祥子・山崎 晃
2. 発表標題 保育者と小学校の就学移行期の子どもへの対応
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱田祥子・越中康治・松井剛太
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染症による就学移行期のカリキュラムへの影響 緊急事態宣言時における保育者・小学校教員へのアンケート調査
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>コロナ禍における就学移行期のカリキュラムに関する実態調査 https://qr.paps.jp/MiV8I 新型コロナウイルスによる就学前施設から小学校の移行への影響 https://cedlab.sakura.ne.jp/cedlab2</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	濱田 祥子 (HAMADA Shoko) (20638358)	比治山大学・現代文化学部・准教授 (35410)	
研究分担者	松井 剛太 (MATSUI Gota) (50432703)	香川大学・教育学部・准教授 (16201)	
研究分担者	越中 康治 (E'TCHU Koji) (70452604)	宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・准教授 (11302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関